



じめんのしたのいきものをよんで

西原小学校 一年一組 松田 萌那

わたしは、なつやすみに「じめんのしたのいきもの」というほんをよみました。おとうさんが、「こどものころによんでおもしろかったよ。」とおしえてくれたからです。わたしは、このほんをよんで、ふしぎにおもったことがたくさんありました。

どうして、ア리가とぶカナブンをつかまえられるのかわかりませんでした。しんでいたのをひろったのかな？それに、アリのすのいりぐちはちいさいのに、おおきなカナブンをどうやってじめんのしたにいれるのが、ふしぎでした。

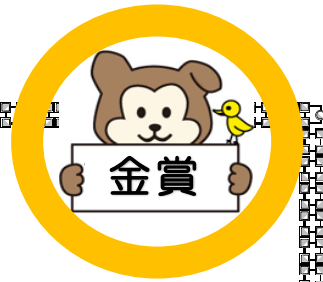
わたしはいま、カブトムシをかっています。このまえ、ようちゅうがうまれました。すごくうれしかったです。でも、ようちゅうがなにをたべるのかしらなかったので、しらべました。すると、ようちゅうは、つちをたべるとかいてあったのに、このほんでは、くさったはっぱをたべるとかいてあつ

たので、ふしぎにおもいました。いえでかうカブトムシと、そとにいるカブトムシでは、たべるものがちがうのかなとおもったので、もういちどしらべてみたら、おうちのつちも「ふようど」という、くさったはっぱでできたつちでした。

ほかにも、ゲンゴロウのようちゆうは、みずのなかでくらすのに、つちのなかでさなぎになるんだとびっくりしました。

もし、わたしがゲンゴロウのようちゆうだったら、みずのなかにずっといたいです。なぜなら、みずのなかのほうがひろいし、おそらがよくみえて、とんでいるむしやとりのおなかのあたりもみえそうだからです。

いつもあるいているみちや、こうえんのじめんのしたにも、あんなにたくさんいろいろなきものがあるとおもうと、すこしこわくなりました。でも、じめんのしたをほってみたいきもします。わたしも、じめんのしたにじぶんのおへやがほしいです。



いのちのまつりとぼく

長谷戸小学校 二年一組 富永 洸樹

ぼくは「いのちのまつり」を読みました。読んでみてさいしょに思ったのは、おはかまいりなのにたのしそうだなあと  
いうことです。「あれっ。」と思いました。「いいのかな。」と  
思いました。そして、きよ年のことを思い出しました。

きよ年の一月、ぼくのひいおばあちゃんがなくなりました。  
ひいおばあちゃんは、いつもにこにこして、ぼくのことを「い  
子だね。」とほめてくれていたので、おそうしきではすごく  
かなしくてなきました。三月のおひがんには、おはかまいり  
に行きました。がんばってそうじしました。いいお天気で、  
おとうとたちははじめてつかうひしゃくで、ジャバジャバ水  
をかけるのがたのしそうでした。みんなががんばってゴシゴ  
シしていたら、なんだかさっぱりしました。おはかといっし  
よに、ぼくの心もきれいになったみたいでした。

おじいちゃんとおばあちゃんは、いっしょけんめいゴシゴ

シしているぼくたちを見て、とてもよろこんでいました。な  
んども

「あーよかった。ああよかった。」

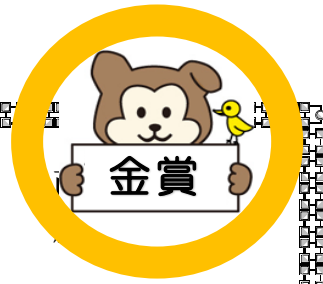
と言っていました。その時は、よくわからなかったけれど、  
この本を読んで、ひいおばあちゃんとむかしのご先ぞさまぜ  
んぶと、おじいちゃんおばあちゃんとぼくとおとうとたちの  
今がつながったからなのかなと思いました。

本を見て、ご先ぞさまの数にびっくりしました。ぼくに  
のちをくれた人、二人。お父さんお母さんにいのちをくれた  
人、四人数えきれないご先ぞさまがだれひとりかけても、ぼ  
くは生まれてこなかった。ということを知って、心の中で言  
いました。

「いのちをありがとう。」

ひいおばあちゃんにもとどくかな。

また、おひがんにはおはかまいりに行くと思います。みん  
なで、水をジャージャーながして、いっしょうけんめいゴシ  
ゴシして、ひいおばあちゃんがすきだったおはぎを、みんな  
でにこにこたべたいと思います。



いのちのまつりを読んで

上原小学校 二年二組 梶 晟太郎

又チヌグスージは、おきなわの言ばです。ぼくがこの本に決めたのは、夏休みに家ぞくでおきなわに行っておきなわの言ばをたくさん聞いたのと、古い小さなおもしろい形の石のおうちを見たからです。

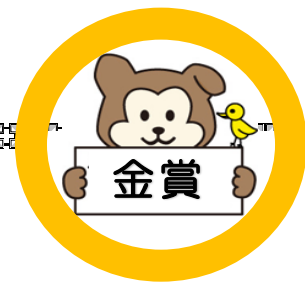
いのちのまつりは、ぼくくらいの男の子のコウチャンがはじめておきなわに来ておうちかとおもったらおはかだったのでびっくりしたお話です。島の人はおはかの前でおどつていたりおべん当を食べたりします。ぼくもお父さんにおきなわで石の家を見た時におはかだよとおしえてもらってびっくりしました。ぼくのおはかまいりは、おはかのそうじをしてしずかにおいのりをするだけだから、おきなわの楽しくてうたったりするおはかまいりにびっくりしました。ぜんぜんちがうんだなと思いました。

びっくりしているコウチャンにオバアが、「ぼうやにいのちをくれた人はだれね？」と聞きました。

ぼくはこの本ではじめてご先祖さまのことがくわしくわかりました。なん千人のご先祖さまが8ページつかって書かれている絵はすごいと思ったし、ぼくにもそれだけご先祖さまがいるいんだと思いまいした。

「数えきれないご先祖さまがだれ一人かけてもぼうやは生まれてこなかった。」と言うオバアの言ばは大すきになりました。ぼくのご先祖さまのだれか一人でも生まれなかったりかけてしまったら、ぼくは生まれなかったかもしれない、ぼくもいのちを大切にしないとけなないと思いました。ぼくはこの本を読んで友だちにもご先祖さまがいていのちがつながっているの、友だちのいのちも大切にしたいと思いました。今ぼくや友だちが生まれてることはすごいことだとわかりました。

これからはおはかまいりに行く時は、ありがたいの気持ちで行きます。歌ったりおどったりもします。



「ぬすまれたたからものを読んで」

猿楽小学校 三年一組 田中 蒼馬

このお話の主人公は、ガチョウのガーウエインです。ガーウエインのゆめは、けんちく家になることでしたが、ほう物でんの見はり役をやっていて、この仕事は好きではありませんでした。だけど、ガーウエインは、王様が好きだし、王様もガーウエインをしんらいしてたので、ガーウエインはがんばってはたきました。

しかし、ある日、たから物がぬすまれてしまいます。ガーウエインは、うたがわれ、さいばんにかけられ、王様からも仲間からもしんじてもらえませんでした。はん決が出る前にガーウエインは、いかりでとび立ってしまいました。

実は、ねずみのデリックがはん人でした。

デリックは、ほう物でんのすみの小さなあなからぬすんでいたのです。自分がわるいことをしたことに気づいて、ガーウエインをすくおうと、たからをぬすみ続けることで、いなくなつたガーウエインがはん人でないことをみんなに気づかせます。その後、たからをきちんともどすとガーウエインに会いに行つて、あやまります。ガーウエインは、デリックも王様もゆるします。

人は、しんじてもらおうと、自分も相手をしんじようと思うし、いかりはゆるすことで思いやりにかわることをできると思います。

ガーウェインのいかりや苦しみがなくなったのは、デレックのすなおな気持ちのおかげだと思いました。

もしも、ぼくが、ガーウェインだったら、信じてくれなかった王様の事をゆるせたかな。信じてもらえなかったことで友だちを友だちと思えるかな。と考えさせられました。

また、ぼくがねずみのデレックだったら、さいばん中に、「ぼくがはん人です。」と言えたかな。デレックと同じで言えなかったかな。もし言えなかったら、なさけないことだろな。と思います。でもガーウェインを助けようと行動をおこしたデレックは、さい最後まで友じようをもっていたのだと思います。

悪いことをしたら、ちゃんとあやまることの大切さ、友だちを思いつづける気持ち、また、相手をゆるしてあげるやさしさ、人を信じる気持ちを、ぼくは、この本から教わりました。

さい後に、ガーウェインとデレックは、親友になったと思います。なぜなら、ガーウェインは、デレックが本当のほん人であることをひみつにしてあげたからです。また、デレックが、おしろにもどって、ほう物でんの小さなあなをそつとふさぎます。ぼくは、その場面で二人の友じようがさらにぐつと高まった感じがしたので、なんだかとても気に入りました。

ぼくも相手を思いやる心をわすれないで、もちつづけて、友だちを大切にしていきたいと思います。





友達になれた一足のサンダル

渋谷本町学園小学校 三年A組 内田 有美

私には、友達がいっぱいいます。いつも学校でいっしょに遊んだり、べんきょうをしています。友達が困っている時には、はげましたり、たすけたりもします。一緒にいて楽しい友達はとても大切です。その『ともだちのしるし』とはどんなものかなと気になったので「ともだちのしるしだよ」という本を読みました。

リナというなんみんの女の子が、きゆうえんぶっしの中から青い花かざりのついた黄色のサンダルをつかみとりました。しかし、片方しかありませんでした。もう片方をさがしていると近くに立っていた女の子もそのサンダルをはいていました。そして、二人はそのサンダルを一日おきに交代交代ではこうと決めました。私だったら、何年もくつをはいていない中で、やっと見つけた片方のサンダルを大事に片方のままはくと思います。

でもリナとフェローザは交代交代ではこうと決めたことで、友達になるきっかけを作ったのだと思いました。リナがフェローザに話しかけた勇気はすばらしいと思います。

その後、リナがアメリカに行くことになり、はなればなれ

になっけてしまひます。リナは新しいくつを買つてもらつたので、おわかれの時、フェローザにサンダルを二つともわたしました。しかし、フェローザはリナに片方持つて行つてほしいと伝えたのです。でも私は、フェローザが片方のサンダルをリナにわたすのはおかしいと思ひました。なぜならリナはくつを買つてもらつていて、フェローザはサンダルいがないはくものがないからです。きつと二人は、ゆい一の友達だよという気持ちがつまつたサンダルを『ともだちのしるし』として、片方ずつ持つことに決めたのだと思ひました。二人のサンダルがいつかまたそろふといひなと思ひました。

なんみんなの人たちは、家や電気・ガス・水道がなくふべんな生活をしていひます。せんそうで家族がころされて、かなしい思ひをしていひることも分かりました。私はこれから、学校に行けること、友達と遊ぶこと、家族や親せきがいひること、ベッドでねられること、美味しいごはんを食べられることなど、にちじようてきなことにかんしゃして生活したいです。また、なんみんなの人たちへのぼ金活動があつたら、自分のおこづかいからぼ金をしたと思ひます。なんみんなの人が一人でも多く、しあわせにくらせる日が早くくることをいのります。



けっして目をそらすな

長谷戸小学校 四年一組 鈴木 未来

「神業ベリーニの、かわいい弟子です!。」

ミレットはこう言われるまで何日もかかりました。

この本は、宿のむすめのミレットがつなわたり師を引退したベリーニに会い、つなわたりのわざを学んで、最後に二人で組み人前でひろうしたお話です。私がミレットならば、何回か落ちてしまっただけであきらめてしまうでしょう。でも、ミレットは、ベリーニに反対されてもこっそり練習を続けました。何度も落ちてもめげず、

「ベリーニさんは、あんなにかんたんそうにわたっていたのに。私だって何度もやればできるはず。」

と、毎日がんばってつなをわたって落ちて、わたって落ちてをくりかえしました。やっと一週間後、つなをはしまでわたることができたのです。

私も似たようなけいけんがあります。それは、三才のころプールにつれていってもらった時、母の泳いでいるすがたがかっこよくて、水の中をあのようにすばやく進みたいと思いました。その後、息が苦しくてすぐくつらかったけれど、母に教えてもらったことを思い出しながら泳いで、毎週日曜日に練習しました。そのおかげで、今は水泳がすぐくとく意になりました。母もぬかせる

くらいです。まだまだ練習を続けていきたいです。

もし、ミレットのように挑戦したいことを色々な理由でことわられたら、私だったらなっとくするまで質問します。それで、なっとくできなければひみつで挑戦します。

一番最後のページに、ベリーニとミレットの世界ツアーのチラシを見ている女の子の絵がかいてあります。その後の二人は、うまくやっているのでしょうか。つなわたりを通して、ミレットはベリーニとのきずなを深めていくのだと思います。ミレットには、不安がいっぱいあるでしょう。世界は見たことがない物がたくさんあります。勉強も山のようにしなければなりません。色々な国の言葉や、つなわたりのぎじゅつなど。とてもいそがしくなると思います。でも、ベリーニとのきずながあるからこそ、二人で不安をのりこえるのです。

このお話の作者のエミリー・アーノルド・マツカリーさんは、あきらめない、挑戦するという心と、人と人とのきずなの深さを伝えたかったのだと思います。私は、それを改めて見返して、まだまだだなと思いました。すぐあきらめるところもたくさんあるし、人の気持ちを考えず行動してしまうところもあるなと思いました。

私も、ミレットのような人になりたいです。私の個性を活かしながら。けっして目をそらさず、つなをわたる人間になれるように。



チョコレート工場の秘密を読んで

猿楽小学校 五年一組 安宅 柚乃

没頭するとはこういう状態のことか、と思えるほど話が面白く、気付いたら三度以上読み直していました。

一度目は、物語の世界に自分自身が入ったののかのような気分で見ました。世界一大きい、世界一有名なワンカの工場できりひろげられる奇想天外な話の数々に没入しました。二度目は、物語の中に出てくる、食べ物やお金がほとんどないきびしい現実を身にひしひしと感じながら読みました。三度目は、主人公チャーリーの優しさや、心の広さを感じながら読みました。

私は、この読書を通じて、二つのことを学びました。一つ目は、食べ物の大切さです。

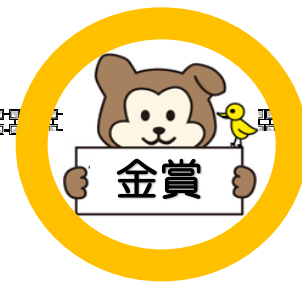
チャーリーの家は、日々の食べ物を食べていくのがやっとの貧しい家庭です。お父さんの給料は少なく、七人の家庭の食いぶちの四分の一しかまかなえないのです。

私たちは、食べ物が充分にある恵まれた環境にいます。その環境に甘えて、食べ物をたくさん食べたり捨てたりすることは、日常の中で当たり前のように起こっています。このような生活をチャーリーがいる世界から見たら、なんてぜいたくなんだと感じます。日本中のぜいたくを変えるのは、いままぐはむずかしいかもしれませんが、例えば食べ残しをできるだけしないなど、私自身がすぐに変えられることか

ら変えていきたいと強く思いました。

二つ目は、家族を大切にすることです。私は時々家族に反抗したり、意地悪いことをしたりすることがあります。先日も、新しい洋服を買ってもらった時に、妹も着ることができるサイズだったのに、貸したくなくて、ケンカになってしまいました。家族だから、思いやることができず、優しくなれないからです。それに対してチャーリーは、家族に反抗するどころか、けんきよな態度でみなに接しているのです。チャーリーは年に一度しか買ってもらえないチョコレートを自ら家族に分け与えたり、貴重な食べ物のパンを母からもらっても決して食べません。こうした行動は、相手を思いやる気持ちがないとできないことで、今の私に足りてないことだと思います。この本を読んで、私も今後、思いやりの気持ちを持って家族に接したいと思いました。

最後に、私がなぜ何度もこの本を読み直してしまったかを考えてみました。それはもしかしたら、作品のタイトルの「秘密」を知りたくて、さぐる旅に引きずり込まれたかもしれないと思います。ピュアな子供の後継ぎを探していたり、チョコレートの作り方など、この作品には「秘密」の答えがたくさんありますが、この「秘密」というタイトルが入ることで、読む人をその世界へさそいこむ仕かけこそ、この作品の「秘密」なのではと考えました。



「リフカの旅」を読んで

神宮前小学校 六年一組 徳渕 愛恵

私は心を強く打たれた。「わたしはユダヤ人とロシア人、両方なの。そしてもっと別のものでもある。もっともつといろんな部分も持ち合わせている。」というリフカの言葉が、私に、自分を知ることの大切さを教えてくれたからだ。

「リフカの旅」を読んだのは、私もこの夏旅をするからだだった。フィンランドでの滞在を通じて、私は新しい世界を知ること、人々と出会うことへの期待と不安で胸がいっぱいだった。私と同じ年の彼女は、どんな素敵旅をしたのだろうかと本を読み進めた。しかし、物語が進むにつれ、それは想像を絶するものだったと思われ知らされた。彼女の旅は、観光旅行ではなく、故郷を追われアメリカへと向かう旅だったこと。現在のよう空路で十時間なんて簡単なものではなく、広大な海を越え時には死と隣り合わせの過酷なものだったこと。そして、甘いチョコレート、やさしいシスター、自由な外出、アメリカへの入国を許可してくれない大人たち、彼女の旅にはいつも、初めて体験する「辛いこと」や「楽しいこと」があふれていたこと。私だったらアメリカへ行くとうい目的を忘れ、途中で挫折していただろう。めまぐるしく押し寄せてくる初めての経験に、自分というものを見失っていたかもしれない。しかし彼女は故郷で過ごした日々を、「ユダヤ人である」と

いうことを忘れはしなかった。たった一人でも、ユダヤへの戒律の儀を行い、自分という存在をしっかりと保ったまま、ついにはアメリカへの入国を果たしたのだ。

「他国のことを知ろうとする前に、自分が何者であるか、日本という国はどんな国か知ることだよ。」と、母が以前言っていたことがある。その時の私は、母は何を言っているのだろうとその言葉の意味を理解できなかった。しかし、この夏、フィンランドへの出発前に、滞在場所の近くで事件があったと聞き、不安でいっぱいだった私の心を救ってくれたのは、母のその言葉だった。外国で日本人が犯罪をしたからといって、日本人全員が犯罪者なわけでもない。日本が過去に戦争をしたからといって、日本人全員が戦争賛成だったわけではない。それは、他の地域、国に生きる人たちも同じことなのだ。リフカが、旅の途中で、憎いはずの相手に手をさしのべることができたのも、自分が何者かわかった上で、「ユダヤ人」として誇りを持ち続けたからだ。

日本人が今までしてきたこと、日本が世界に持たれているイメージを知ること、いいことばかりではないだろう。知りたくなかったような、目をそむけたくなるような事実もあるだろう。しかし、リフカが言うように、私たちは実に様々な要素で構成されているのだ。その多種多様な部分を受け入れ、自分以外の世界を理解し、向き合うことから逃げたくはない。日本人として、一人の人間として、私はそう強く感じた。